

# 北の大地

ひらまつ ゆうか

## 【登場人物一覧】

### 【日本のとある村】

聾（セイ・100歳） ……とある村に住み着いている地狐

人間の姿に化けられる

レラ（12歳） ……とある村の少女。病気がち

？（17歳） ……神となったセイを何故か視える謎の女子高生

### 【ウスケシ（現…函館付近）のとある村】

ミナ（17歳） ……コシャマインの村で治療師をしている

コシャマイン（推定50代） ……ウスケシの村長

ヒシルエ（30代） ……コシャマインの妻

ウタリアン（20歳） ……コシャマインの息子

シサム（15歳） ……ミナの付き人

### 【蝦夷地に逃げてきた者】

安東政季（推定40代） ……南部氏との争いに敗れ、

蝦夷地に身を隠す

北海道の実権を握る男

武田信広

（コシャマインを倒した時は27歳） ……安東と共に蝦夷地に渡る

### 【その他】

とある村のモブキャラ↓村人Aや村子A

ウスケシのモブキャラ↓コタンA↓

コシャマインの戦いに参加したアイヌの戦士↓アイヌA↓

## 【あらすじ】

時は室町時代。

日本のある、差別もなく、とても平和な村があった。病気がちのレラは、その村に村の人々に助けられながら、親友の聳（以下…セイ）と平和に過ごしていた。

ある時、村人たちにちよっかいを掛けに来た地頭の怒りを買い、レラが殺されてしまった。

助けに間に合わなかったセイは、悲しみに暮れながら、レラの遺体をそっと抱き抱えると、何が入っているかわからない小さい袋と、見たことがないネックレスが落ちてた。

村人たちに寄ると、レラのお父さんが持っていた形見だという。

更に、レラのお父さんは、ウスケシという、遠い北の和人からは蝦夷地と呼ばれる場所から来たそうだ。

レラのお父さんが見た景色、レラが見たかもしれない景色ををみるために、一人ウスケシへと旅立ったセイ。

ウスケシまでもう少しというところで、雨に降られ、船が横転し、溺れてしまう。気を失ったセイは、ウスケシの浜辺で、コシャマインの村人たちとミナという少女に助けられる。

ミナは、自分の體を犠牲に、人の傷や病気を癒す治療師をしていた。

コシャマイン達に温かく迎え入れたセイは、ミナやコシャマインの息子・ウタリアン達と共に、アイヌの様々な文化に触れていく。

しかし、1年前に起こった、口論になった和人がシノリ村の青年を殺傷する事件をきっかけに、和人たちに対する不信感が募っていた道南のアイヌの人々は、コシャマインを筆頭に、和人に対して、戦を挑もうとしていた。

死ぬとはわかっていても、治療師として戦に参加しようとするミナと口論になるも、戦へと向かうミナたちを送り出したセイ。

道南に12もあった和人の館を次々と倒していき、1年が経ち、残り2館となったころ、花沢館に身を寄せていた武田信広に七重浜まで追いやられ、ミナは治療で、コシャマインとウタリアンは武田信広に弓で殺される。

死体として村に帰ってきた、ミナたちをみて悲しみに暮れていたセイだが、シサムに連れられ、あの世に繋がる洞窟でミナと再開する。

そして、元いた村に戻り、レラと約束したこの村を守るくらに強くなるということを果たす。

1454年8月

○暗い森の中

息を切らしながら全力で走る安東政季、政季の妻、  
武田信広、政季の妻の御付きの2人。

木に足を引っかけてこける政季の妻。

全員走りを止め、安東氏の妻の方を見る。

安東氏の妻に駆け寄る政季、御付き2人。

政季「大丈夫か！」

倒れている妻の肩に手をかける安東氏。

安東妻「大丈夫です…。」

妻の腕を肩に回し、起き上がらせる安東氏。

安東氏「もうすぐだからな。少しの我慢だ。

安東妻「ありがとうございます。(ボソツと)」

全員再び歩き始める。

○津軽海峡

奥に薄く北海道が見える。

ボラード(木)に繋がられている船。

全員船の方に走る。

政季↓政季妻↓武田↓御付き2人の順に船に乗る。

○海

魯で船を漕ぐ武田。

御付きの女、安東氏の妻に着物をかける。

妻の肩に手を置く安東氏。

手を添える安東氏の妻。

蝦夷地を見つめる2人（安東氏、妻）。

蝦夷地に向かって進む船（後ろ姿）。

星が輝く夜空

テロップ「北の大地（タイトル）」

1456年5月

○とある村

田植えをする村人たち。

飛ぶ鳥たち。

馬鋤を使って牛に犁を引かせ田起こしをする村人。

野菜を収穫する村人。

あぜ道で蝶々を追いかける子供たち（三人）  
子供達「わー」

田植えをしている村人母と子。

村人子「今年もいっっぱいお米とれるかな！」

村人母「そうだねえ。お天道様にお願いしようか。」

村人母子が太陽を見る。

村人母子「お天道様。（ゆっくり）」

○田んぼから100mくらい離れたところ

田んぼに向かって馬が走る。

○とある村

村人母子「今年もお米がいっぱいとれま…」

親子の前で馬が止まる。

馬にまたがる地頭。

村人母子をにらみつける地頭。

地頭「おい、何を話しておる。はよ苗を植えんか。」

地頭をにらみ返す村人母。

地頭「なんだその顔は。文句があるなら言ってみろ。」

不安そうな顔で母の後ろに隠れる村人子。

村人母「何でもありません。さあ、お前田植えをやるよ。」

村子「う、うん」

地頭「さっさと働け。(馬から降りながら)」

横から石が飛んできて地頭の頭に当たる。

地頭「いってえー!。」

当てられた場所を手で押さえる地頭。

地頭「何者だ。」

石が飛んできた方を見る地頭。

田んぼから30mほど離れた場所でポロポロになった着物を着ている

レラが地頭を怒った顔で見つめる。

レラ「田植えの邪魔をしているのはお前の方だい。」

地頭「貴様、私が誰だかわかったの無礼か。」

レラ「それがなんだ!困っている人を助けただけじゃないか。」

周りの村人もくすくすと笑う。

腹を立て、刀を少し抜く地頭。

村人母「刀を収めください、地頭様。」

地頭「∴。チッ(舌打ち)」

馬に乗りあがる地頭。

地頭「お前たちもさっさと働け。」

来た道を帰る地頭。

親子の前にしゃがみ込むレラ。

レラ「大丈夫だったか？」

村人母「余計なことをして。切られたらどうするんだい。」

レラ「そんなことを考えてもみなかった。」

村人母「はあ。(溜息) そんなことよりあんた、熱は治ったのかい？」

レラ「おかげさまで。」

村人母「良かったよ。レラは昔から病弱だし、おとうもおかあも

病気で死んで、こっちは気が氣じゃないんだ。」

村人子「レラ姉ちゃん病気なん？」

レラ「心配すんなあ。私はそう簡単には死なん。」

ニッコリ笑うレラ。

村人母「病み上がりだけど気分転換に田植え手伝ってくかい？」

レラ「すまん。今日は久々に遊んでくる。」

村人母「最近知り合った子だったけか。」

レラ「そうそう。」

村人母「この辺に住んでるんか？」

レラ「たぶん…？(聾の正体をばらさないようにごまかす)」

村人母「この村の子はみんな知つとるから、隣村の子か？」

どれだけの距離を歩いてくるんなその子は。(苦笑い)」

レラも苦笑い。

村人母「今度家に泊まりに来てもらい。紹介してよ。」

レラ「ありがとう。言っておくよ。」

じゃあつと祠のある山の方に向かうレラ。

手を振り返す村人母子。

## ○山の中

木をかき分けながら歩くレラ。

立ち止まるレラ。

レラ「聾(セイ)！」

聾が祠の前で立っている。

振り返るセイ。

セイ「レラ！熱は治ったか？」

レラ「この通り」

セイ「良かった」

レラの手を握るセイ。

セイ「今日はレラを連れていきたい場所があるんだ。ついてきて。」

レラの手を引っ張りながら走り出すセイ。

レラ「うん！」

### ○山の中／頂上付近

走る2人。

セイ「こっちを右！（レラの手をつないだまま）」

右に曲がる。

セイ「ついたよ！」

レラ「わあ…」

### ○山の中／頂上

崖の下に湖が広がる。

セイの横に並ぶ。

レラ「こんな所あったんだ…知らなかった。」

満足そうに笑うレラ。

セイ「今日は満月だから夜までここで待とう。」

レラ「うん。でもご飯とか何も持ってきてないや！」

懐からおにぎりを出すセイ。

セイ「じゃーん。」

レラ「おおお。セイが握ったの？」

セイ「ううん。お供え物。」

レラ「…アハハ！」

### ○同／夜

空を見ながら並んで寝ているレラとセイ。

レラ「本当にきれい。いつも見てる空と変わらないのに、今日は一番綺麗に

見える。」

セイ「喜んでくれてよかったよ。」

レラ「何か今日の満月も少し青く見えるね。」

セイ「ほんとだ。」

流れ星が流れる。

空を指さすレラ。

レラ「流れ星！」

セイ「え。どこどこ。」

流れ星がまた2回流れる。

空を指さすレラ。

レラ「ほらまた！」

セイ「また見逃した。」

残念そうな顔をするセイ。

セイを見て笑うレラ。

レラ「流れ星に願うとその願いが叶うらしいんだ。」

セイ「じゃあ次こそは見ないと。」

空を見つめる。

流れ星が流れる。

2人とも目を瞑る。

セイ「願えた？」

レラ「うん。」

セイ「何願った？」

レラ「身体を強くしてこの村の皆を守れるようになりますように。って。」

レラ「セイは何願った？」

セイ「この村を守るくらい立派な狐になりますようにって願った。」

レラ「同じだね。」

微笑み合う二人。

セイ「じゃあ。いつかこの村を2人で日本一幸せな村にしよう。」

指切りをする2人。

レラ「約束」

翌日

○祠の前へ里

狐の姿で祠の横で寝ているセイ。

微かにレラの叫び声が聞こえる。

セイ「レラ?!」

山から里へ降りる。

辺りをキョロキョロする。

誰一人もいない静かな村。

セイ「まだ明るいのに何で誰もいないんだ。」

辺りをキョロキョロしながら歩く。

息を切らしながらセイの肩をつかむ村人母。

村人母「お、おまえさん。ハアハア」

驚いた顔で村人母の方を見るセイ。

セイ「あなたは…。」

村人母「レラが！レラが悪党にさらわれた。」

セイ「!？」

別の村人達が集まってくる。

村人母「地頭の野郎が悪党どもを引き連れてきたんだ。

あいつ、昨日恥をかかされた腹いせにレラを連れてったんだ。

みんな怖くて助けられなかった…」

村人みんな下を向く。

セイ「レラは強いです。そんなことで恨みませんよ。

レラはどこに連れていかれましたか？」

村人母「レラはあっちの山に入ってた。」

時間はまだそんなに経っていない。」

村人A「でも相手は悪党だ。」

村人B「あんたまで何されるかわからないよ。」

セイ「大丈夫。今こうしている間にレラが危険な目にあっているかもしれない。」

ありがとうございます。教えてください。」

村人らにお辞儀をして山の方へ走るセイ。

走るセイを見送る村人ら。

## ○山の中

狐の姿で山の中を走るセイ。

セイ「お願いだ。間に合ってくれ。」

木々にぶつかったり、倒れている木を飛び越えながら、走るセイ

セイ「レラの血の匂い。」

更に加速する。

少し開けた場所に出る。

セイ「レラ！」（人の姿に戻っている）

悪党に囲まれてレラが頭から血を流して倒れている。

悪党ら振り向く。

悪党A「ああ。なんだおめえ。」

怒りに満ちた表情になるセイ。

じりじりと悪党らに近づくセイ。

セイ「おのれ…。よくもレラを…。」

耳と尻尾（3本）が生える。

ギョツとする悪党ら。

悪党B「ば、化け物！」

逃げ出す悪党ら。

凄い速さで悪党Aの前に行き胸倉をつかむセイ。

爪を立てる。

悪党A「お慈悲をくだせえ。お慈悲をおお。」

セイ「レラは凄く苦しんだんだ。悪いことは何もしてないのに。」

そんな理不尽なことはないだろう。」

より一層恐怖に満ちた顔になる悪党A。

悪党A「あ。あ。あ。」

悪党Aの叫び声が響く。

## ○山の中

レラをお姫様抱っこして山を下るセイ。

レラのポケットから袋とネックレスが落ちる。

拾い上げるセイ。

自分のポケットにしまう。

## ○里

セイの帰りを待つ村人たち。

遠くでセイの姿が見える。

村人母「レラ！！！」

セイのところに走る村人たち。

血まみれのレラを見て絶句する村人たち。

村人母「あんた…」

セイ「間に合いませんでした。(下を向く)」

泣き崩れる村人たち。

セイ「レラの家近くに埋葬しようと思います。」

村人B「あんたも傷だらけじゃないか。先に手当をした方が…。」

セイ「傷なら勝手に治ります。穴を掘るのを手伝って下さい。」

うなづく村人たち。

## ○レラの家

レラの両親の墓の横に穴を掘る村人たち。

レラを抱きかかえて簡易的な棺に入れるセイ。

涙を流すセイ。

セイ「レラとしたいこと、話したかった事、いっぱいあったのに。もう一回、いつもみたいにセイって言って笑ってくれよ…。レラ…。」

泣き叫ぶセイ。

セイの涙がレラに落ちる。

泣く村人たち。

村人母「簡単に死なないって言ってたじゃないかあ。」

レラをのぞき込む村人子。

村人子「いつも遊んでくれてありがとう。」

向こうでもこれで遊んでね。」

レラの棺に蹴鞠を入れる。

村人母「向こうで風邪をひいても困らないように。」

葉を入れる。

村人A「レラちゃんの好きだった茄子と大根。向こうでも沢山食べるんだよ。」

沢山の茄子と大根を入れる。

棺の中に村人たちが各々持ってきた物が入られている。

棺の蓋を持ち、涙をこらえながらレラを見る。

セイ「レラ。こんなに沢山のお土産貰えて良かったなあ。

こんなにも愛されてレラは幸せ者だな。

レラの願いは僕が叶えるから。ありがとう。レラ。」

蓋を閉じる。

しゃがんでレラが埋まっている土の上に白い彼岸花を供えるセイ。

目をつぶり手を合わせる。

ポケットにレラの持っていた袋とネックレスを入れてたことを思い出し、  
村人に見せるセイ。

セイ「レラが持っていました。これが何かわかる人はいますか？」

村人全のぞき込む。

ハッとする村人D。

村人D「それ、レラのおっとさんがもったやつでねえか。」

村人C「そうだな。レラのおとうが、この村にやってきた時からもったやつ  
だな。」

セイ「レラのおとうさんは、この村出身ではないのですか。」

村人母「そうだ。もう15年くらい前だけだな、ドッサという音がして、

振り返ると、人が倒れているんよ。しかも見たことのないは織物をした。  
それで、一旦千代の家に運んで看病したんだよ。」

村人E「その千代ってのは、レラの母親なんだよ。」

村人母「レラのおとう、名前はアンラインとってね、病気がちだったみたいで  
ね、中々、外に出てくることはなかったんだが、  
いつも家の中から挨拶してくれるいい人でね。  
千代もあまりあの人のこと話さなかったからね。」

村人F「おら、千代からアンラインの話聞いたことあるぞ。」  
アンラインの住む街はウスケシ（函館）という地域で、ずっと北の  
海を渡った所にあるらしい。  
自然豊かな場所で、見たことない動物がおるらしい。とても美しい  
文化を持っていると聞いた。」

村人母「もしかしたら、その首飾りはウスケシという場所で作られたものかも  
しれないな。」

セイ「ウスケシ…。教えていただき、ありがとうございます。」

手に持った装飾品を見つめ、ぎゅっと握るセイ。

翌朝

明け方（午前5時ごろ）

## ○レラの墓の前

旅支度をしたセイがレラのお墓の前に着く。

お墓の前にしゃがみ、白い彼岸花を交換する。

セイ「レラ、今からレラのお父さんが住んでいたウスケシという場所に向かうよ。ここから2月ほどかかるらしい。ここに戻ってくるのも

何年後かわからない。

毎日来れなくなるけど、レラはここから私のことを見守っていてほしい。」

お墓を見つめるセイ。

立ち上がる。

セイ「いってきます。」

里の方へ向かって歩き始める。

## ○里

山から下りるセイ。

ハツとするセイ。

村人らが外に出てセイを見ている。

村人子が眠そうに目をこする。

村人らに駆け寄るセイ。

セイ「皆さん。朝早くにどうしたんですか」

村人母「あんたに渡すものがあってね」

背中に隠してあるかごに入れた漬物と魚の干物をセイに渡す。

村人母「はい。これ」

それぞれセイに持ってきたものを渡す村人ら。

驚くセイ

セイ「…いいのですか」

村人母「みんな心配なのさ」

村人F「これくらいあれば食うには困らないだろう」

嬉しそうな顔をするセイ。

セイの袖を引っ張る村人子。

村人子の方を見てしゃがむ。  
村子「これ、お守り。」

藁でつくった手のひらサイズの狐のぬいぐるみを渡す村人子。  
セイ「ありがとう。」  
村子「レラちゃんの墓守は任せて」

微笑んで、村子の頭を撫でるセイ。  
ニッコリ笑う村人子。

立ち上がるセイ。  
セイ「みなさん。本当にありがとうございます。」  
村人母「レラの墓と祠の掃除は任せな。」

一瞬驚くセイ。  
セイ「はい。いってきます。」  
手を振って見送る村人達。

歩きながら村人らに手を振り返す。

### ○森林（明け方・薄暗い）

セイの右から太陽が昇る。  
まぶしくて手で目を隠す。  
セイ「あっちから太陽が昇るといことは、方向はあっているな。」  
嬉しそうに微笑んでまた歩き始めるセイ。

### ○拓けた道（午前11時頃）↳セイの旅路

近くの小川を見つけ、水を飲む。  
近くの木陰でおにぎりともらった漬物を食べる。  
歩き始める。  
木の根元で寝る（夜）。

茶屋で団子を食べる。

木の棒を地面に立てて影の方角を見る。

### ○津軽（陸奥国北部）明け方

交易が盛んで、蝦夷と呼ばれる人々が国外から運びこまれた動物の毛皮（アザラシ、ラッコ、ワシなど）、鮭などが運ばれてくる。

キヨロキヨロ辺りを見るセイ。

少女「ねえ（OFF）」

声をする方を見るセイ。

少女「何か探してるの？」

セイ「ウスケシという場所に行きたいんだ」

少女「ウスケシ：（なんか聞いたことあるなあ）あつ。海の向こうに見える陸がそうだよ」

海の向こうを指さす少女。

少女「使ってない舟あるからそれで行ぐといいよ（青森訛り）」

セイの手を引っ張る少女。

少女「こっち！」

### ○同／舟着き場

少女「あれ使っで」

舟を指さす少女。

舟に近づく2人。

舟に乗り込むセイ。

舟につながれている縄を外す少女。

少女「海流にのっていけば着けるよ」

セイ「ありがとう」

セイに手を振る少女。

2人の後ろ姿（少女手を降す）。

○海の上(夜) 500m以内で、ウスケシに着く所

寝る間も惜しんで舟を漕ぐセイ。

寝落ちしそうなセイ。

雨が降ってくる。

セイ「雨だ…。」

強い風が吹く。

波が突然高起する。

バランスを崩すセイ。

セイ「わ。わ。」

船がひっくりかえる。

海に放りだされる。

狐の姿で泳ぐ。

また波が高起する。

海水を飲み込みすぎて、上手く水面へ上がれない。

ごぼつと泡を出す。

段々意識が遠くなる。

気を失うセイ。

ブラックアウト

○ウスケシの海岸(夜)

村人が浜で気を失っているセイを見つける。

コタンA「おい。人が倒れてるぞ。」

騒がしい声に薄目を開けるセイ。

コタンB「早くミナ様の所に連れて行け。」

視界がだんだん閉じてくる。

○ミナのチセの中（12時ごろ）／1456年7月

ガバツと起き上がるセイ。

辺りをキョロキョロする。

セイ「ここはどこだ。」

壁に飾ってあるアイヌの伝統的な服を見つめる。

布団（熊の革）をどかして、壁に飾ってある服の方に近づく。

セイ「レラの家にあった服と似てる…。」

部屋を開けるミナ。

ミナ「起きていたのか。（OFF）」

ミナの方をじっと見て警戒するセイ。

笑顔で近づくミナ。

ミナ「そんな警戒するな。取って食ったり、毛皮にしたりはしない」

驚いた表情でミナを見つめる。

机にお水を置くミナ。

ミナ「よく眠れたか？」

うなづくセイ。

セイ「お陰様で」

安堵の表情を浮かべるミナ。

ミナ「そうだ。君に3人ウエンカムイ（悪霊）が憑いていたから  
祓っておいたよ。」

セイ「え？」

シャナ「ミナ様。患者様がいらっしやいました（OFF）」

部屋の前に立つシャナ。

ミナ「わかった。すぐ向かう」

お辞儀をして部屋を去るシヤナ。

セイ「お前は医者なのか？」

ミナ「医者と言えはそうだが…。知りたかったら私について来るといい。」

部屋を出るミナ。

お水を一気に飲んでミナの後を追うセイ。

### ○ミナの部屋の隣の医務室

骨折して右足首が異様に曲がってる子供Aが足を伸ばし座っている。

骨折した部分が紫色に腫れ上がって、血だらけの足。

心配そうに見つめる母A。

子供Aの前に座るミナ。

ミナの後ろで見つめるセイ。

母A「木に登っていたら足を滑らせてしまっって。」

ミナ「ああ。これはひどいね。」

泣くのを我慢する子供A。

子供A「痛い…。(苦しそうに)」

ミナ「すぐに治してやるから、少しだけ我慢するんだ。」

骨折した部分に片手を添えるミナ。

目をつむり黙る。

骨折した部分の徐々に腫れが治おり、元の形に戻る。

驚くセイ。

骨折した部分が完全に治る。

目を開け、手を引込めるミナ。

ミナ「終わったよ。足を動かしてみな。」

恐る恐る足首を動かす子供A。

子供A「痛くない…。痛くないです。」

嬉しそうに足首を動かす。

母A「ああ。ミナ様。ありがとうございます。」

拝みながら頭を下げる母A。

子供A「ミナ様。ありがとうございます！」

笑顔で頭を下げる子供A。

ミナ「今度は気をつけるんだ」

子供Aの頭を撫でる。

ニッコリ笑う子供A。

### ○チセの外

ミナに手を振る子供A。

頭を下げて家へと向かう親子たち。

手を振り返すミナ。

ミナ「シャナ。この後皆をチセの集めて、セイの紹介をしようと思うんだ。」

シャナ「今、コシャマイン様たちはユク（鹿）狩りに言っておりますので、

帰ってきたら、お伝えいたします」

ミナ「よろしく頼んだ」

### ○ミナの部屋

部屋に入るミナとセイ。

床に座るミナ。

ミナ「座って話そうではないか。」

床に座るセイ。

辺りをキョロキョロするセイ。

珍しい数々の装飾品。

ミナ「珍しいか？」

セイ「この模様の服は親友の家にあった」

ミナ「ほう。それは珍しい」

セイ「親友の父がウスケシという地域に住んでいたと聞いた」

ミナ「ウスケシはこのことだが」

セイ「…。そうか。辿り着けたのか」

ミナ「でも珍しいな。そっちに住むものはあまりないのだが」

黙るセイ。

セイ「さっきの治療、凄い力だな。奇跡だな」

ミナ「…。」

爆笑するミナ。

ミナ「奇跡か…。そんなことはない。ちゃんと代償はある」

セイ「代償…」

自分を指さすミナ。

ミナ「それは、力を使うたびに自分の身体が衰えていくことだ」

セイ「…」

ミナ「私の右耳は聞こえない。左目はもう視えない」

セイ「そんな代償を払ってまでもなぜ治療をするんだ」

ミナ「…少し昔話をしようか」

ミナ「元々私は、別のコタン…。村に住んでいたんだ。

私の村は、他の村とも離れていて、川からも遠かったから私たち家族しか住んでいなかった。それでも、何不自由なく暮らしていた。

でも、ある時アチャ…。父がカムイタシユム（天然痘）になった」

## ○ミナの過去回想

### ○ミナの昔住んでいたコタン／チセの中

5歳のミナと母親が天然痘で伏せている父親の体を仙台蕪の煮汁で拭く。

窓に行者ニンニクが掲げている。

ミナ幼「アチャ…（泣きそうな顔）」

ミナ父「心配するな。大丈夫だ」

ミナ母「アチャは強いし、ミナが毎日看病してくれてるので、絶対負けないうよ」

ミナ幼「…うん」

ミナN「それでも父の病状は治らなかった」

○海／2か月後

ミナ父「行ってくるよ」

父を抱きしめるミナ。

ミナ父「すぐに戻ってくるよ。」

うなづくミナ。

ミナ父「しばらくの間任せっきりにしてごめんな」

ミナ母「大丈夫。だからパコロカムイにみつからずに早く帰ってきて」

うなづくミナ父。

船を漕ぐミナ父を見つめる2人の後ろ姿。

ミナN「あれつきり父が帰ってくることはなかった。そしてほどなくして母もカムイタシユムで倒れた」

○ミナの昔住んでいたコタン

チセで寝込むミナ母。

薬草をチセの中に運ぶミナ。

半年後。

母親の墓の前で手を合わせるミナ。

薬草を集め、研究するミナ。

○同／母親が死んで3年

薬草を集めるミナ。

コシャマイン「こんな所で一人で暮らしているのか。(OFF)」

振り向くミナ。

コシャマインがミナのことを見下ろしている。

ミナ幼「アチャとハポ(お父さんとお母さん)は死にました」  
コシャマイン「それは大変だったな」

ミナ幼「…」

ミナの持っている薬草を見る。

コシヤマイン「それは…」

ミナ幼「これは、ヨモギの葉とウドの根、露の根です。すりつぶして切り傷に塗ります」

コシヤマイン「小さいのに、薬草にとっても詳しいのだな」

ミナ幼「アチャがとても詳しくかったので。あとは色々な薬草を使ってどんな効果があるか試したりしました」

コシヤマイン「凄いな…。どうだ。私のコタンにこないか。薬草に詳しくかったアチャポ（おじさん）が死んでしまった。

誰も薬草に関して教えて貰ってなかったから、困っていたんだ。私と一緒に来れば君だけのチセも用意できるし、食料の心配も要らない。

それにそんなみすぼらしいルウンペ（伝統衣装）だと亡くなったアチャもハポも君を守っているカムイも泣くだろう」

自分のみすぼらしいルウンペを見るミナ。

コシヤマイン「どうかな？」

うなづくミナ。

ミナ幼「行きます」

満面の笑みを見せるコシヤマイン。

コシヤマイン「歓迎するよ」

用意が終わり、ヌサ（御座）の前で祈るミナ。

ミナ幼「行ってきます」

ミナが立ち上がると風が吹く。

手を差し伸べるコシヤマイン。

その手を取り、二人で歩き始める。

## ○回想終わり

## ○同

ミナ「あのまま一人で居ても、嫁にも行けないし、私だけじゃ狩りも

できず、野垂れ死んでいたかもしれない。

コシヤマイン様とこの村の皆には暖かく迎え入れてくれて本当に感謝しているんだ。それにシヤナもコシヤマイン様に拾われた身なんだよ。」

セイ「その時からその力は使えていたのか？」

ミナ「いや。この力は、この村でもカムイタシムムが流行った時に、薬草だけではどうもできず、死にかけていく村の皆を見て、助けたらどうも思ったら、使えるようになっていた。」

パコロカムイに打ち勝ったんだって皆喜んでくれたよ」

セイ「村の人はミナが代償を払っているって知っているのか？」

ミナ「知らないと思う。でも私もこの力を使うのは、重い病気や

重度の怪我にしか使っていない。だから、大丈夫だ」

セイ「…」

ミナ「そういえば名を聞いていなかったな」

セイ「聾（セイ）」

ミナ「セイ。よろしく。私はミナ。セイらの言葉で笑うという意味だ。」

私の笑顔が好きだったから、この名前を両親が付けてくれたんだ。」

ニッコリ笑うミナ。

セイ「確かに。」

シヤナ「ミナ様。皆様帰ってこられました」

ミナ「ありがとう。セイ。行こうか」

セイ「うん」

部屋を出る二人。

### ○コシヤマインのチセ／夜

コシヤマインのチセの中に入るミナとセイ。

ミナ「コシヤマイン様。お待たせいたしました」

コシヤマイン含め、村人全員が炬を囲む。

コシヤマイン「おお。元氣そうで良かった」

セイ「助けて頂き、ありがとうございました」

お辞儀をするセイ。

コシヤマイン「私は、コシヤマイン。隣が私の妻のヒシルエ」

微笑むヒシルエ。

コシヤマイン「こっちが息子のウタリアン」

ウタリアン「ウアムキリアンナ」

きよとんとするセイ。

ミナ「よろしくって」

セイ「よろしく」

コシヤマイン「このコタンは、私たち一族と身寄りのない者と一緒に暮らしているんだ。セイも暫くの間ここにいとると良い。なんならここでずっと過ごしても良いからな」

セイ「お氣遣いありがとうございます。皆さん。よろしくお願いします」  
皆に向かってお辞儀をするセイ。

微笑む村人たち。

窯で温めたウレハル（熊の足裏の肉）を器に入れ、セイに渡す

コシヤマイン。

コシヤマイン「これは、歓迎の印だ」

器を受け取るセイ。

セイ「いただきます」

食べたことない美味しい味に目を開くセイ。

セイ「とっても美味しいです」

コシヤマイン「今年仕留めた熊のここ（足裏を指さす）だ。

三日三晩煮込み続けるんだ」

ミナ「ウレハルはね。珍しいお客に振る舞うご馳走なの。

キムンカムイが授けてくださった今年一番おいしいお肉だよ」

味わって食べるセイ。

コシヤマイン「そうだ。ヒシルエとミナ。サロルンリムセをやってあげたらどうだ」

ミナ「それは名案ですね」

ヒシルエ「みんな。準備しましょうかね」

女性陣（10人）が一斉に立ち、準備をする。

キョロキョロするセイ。

ヒシルエ含めた4人とミナを含めた6人に分かれる。

ヒシルエが鶴の声の真似をする（その他手拍子）。

ミナ達が二重に着たルウンペを鶴の羽のように動かす。

ヒシルエ達が、歌い始める。

サロルンリムセを始める。

見入るセイ。

コシヤマイン「どうだ？美しいだろ」

セイ「はい…。とつても」

その後20秒ほどサロルンリムセを行い、フェードアウト。

○同

皆の笑い声。

ご飯を食べながら笑い合う皆（お膳でもてなされている）。

コシヤマイン「そういえば、セイは何でこんな所に来たんだ。」

セイ「死んだ親友の父がここから来たと聞いて、親友が見るはずだった景色を見たくて来ました」

コシヤマイン「商いでくるシサムは多いが、セイみたいなシサムは珍しくてな。

素敵な理由だな」

セイ「ありがとうございます。でも、本当は親友と来たかったです」

ミナ「…」

部屋の奥から取ってきたルウンペをセイに渡す。

コシヤマイン「昨日完成したんだ。これを着なさい」

受け取り、ルウンペを着るセイ。

コシヤマイン「これでお前もアイヌだ」

セイ「ありがとうございます」

○コシヤマインのチセの外

コタン子供達「コシヤマイン様たちアプンノシニヤン！（おやすみなさい）」

コシヤマイン「アプンノモコロヤン。みんな」

手を振りそれぞれのチセに帰るコタンの子供たち。

ミナ「コシヤマイン様アプンノシニヤン」

コシヤマイン「アプンノモコロヤン」

コシヤマイン「セイ。アプンノモコロヤン」

セイ「アプンノモコロヤン？」

笑うコシヤマイン達。

ミナ「セイ。アプンノシニヤン！（こそっと）」

セイ「あっアプンノシニヤン」

手を振ってミナのチセに戻るミナとセイ。

止まって後ろを振り返るセイ。

コシヤマインがチセの横の檻で飼われている子熊を撫でている。

熊を見て身震いするセイ

ミナ「セイ？」

セイ「なんでもない。」

### ○ミナのチセ

ミナ「セイ。アプンノモコロヤン」

セイ「さっき僕がコシヤマイン様に言った言葉」

ミナ「あー（笑）コシヤマイン様くらいの年齢の方に言うと、死んでくださいって意味になっちゃうの」

くすくすと笑うミナ

セイ「…（頭を抱えながら）何てことを…」

ミナ「難しいよね（セイの頭を撫でる）」

セイ「…」

赤面するセイ

ミナ「今日は楽しかった。最近シサムを警戒していたから、

コシヤマイン様がセイのことを気に入ってくれて良かったよ」

セイ「うん」

ミナ「アプンノモコロヤン。おやすみ」

セイ「おやすみ」

### ○セイの部屋

ルウンペを脱いで木で吊るす。

床に寝る。

ポケットからレラの形見を取り出し掲げてから胸に当てる。

セイ「レラ。ウスケシに来れたよ。ありがとう。そっちで元気にしてる？  
…。おやすみ。(小声で)」  
ブラックアウト

### ○コタン(朝9時頃)

厠から出てくるセイ。  
ウタリアン「セイ。(OFF)」

狩りの道具一式を持ったウタリアンがセイを呼び止める。  
セイ「えっと…」  
ウタリアン「ウタリアンだよ。ウタリって呼んでくれ」  
セイ「おはよう。ウタリ」  
ウタリアン「一緒に狩りに行かないか？」  
セイ「行きたい！」

ニコツと笑い、弓と槍をセイに渡す。  
ウタリアン「槍の先は毒が塗ってあるから気を付けて」  
セイ「…」  
ウタリアン「行こうか」

### ○裾野付近

木々をかき分けて登る2人。

息が切れないセイ。  
ウタリアン「セイ、息切れてないな」  
セイ「少し疲れたけどね」  
ウタリアン「もう少しだから」

続けて登る2人。

目印のあるところをウタリアンが通過。  
ウタリアン「セイ、そこ仕掛けがあるから危ない…！」  
セイ「え？」

仕掛け矢が飛んでくる。

くの字で避けるセイ。  
ウタリアン「大丈夫か！」

セイ「…なんとか…」  
ウタリアン「良かった…伝えるのが遅かったな。すまん」  
セイ「ハハハ…」

苦笑いをするセイ。

再び登る2人。

### ○同／鹿狩りスポット

ウタリアン「ここだ」

足を止める2人。

ウタリアン「セイ。こっち」

草むらに隠れ、息をひそめる二人（風下）。

イパツケニ（鹿笛）を吹くウタリアン。

しばらくすると、奥の方から雄鹿が、現れる。

狙いを定めて、鹿の首に向かって矢を放つウタリアン。

鹿を仕留める。

ウタリアン「…」

鹿に近づき、弓を抜く。

死んでいることを確認し、鹿を首に乗せる。

ウタリアン「次はセイ。ここにはもう鹿は来ないと思うから。こっち」

別の場所に向かう二人。

別の鹿スポットに到着（風下）。

ウタリアン「こっち」

草むらに隠れる二人。

ウタリアン「セイ。これ吹いてみて」

イパツケニ（鹿笛）を吹いてみるセイ。

しばらくする角が顔面に下がった雄鹿が現れる。

弓を構えるセイ。

ウタリアン「あれはダメだ。喰ったら體が溶ける」

草むらから出て鹿を追い払う。

ウタリアン「残念だが、今日はこれくらいにしよう」

山を下る二人。

○コタンに近づいていく道中

ウタリアン「セイ（OFF）」

歩みを止めるセイ。

指を指すウタリアン。

奥の方に白兎が草を食べている。

ウタリアン「いけるか？」

セイ「兎は得意」

息を殺して兎に少し近づくとセイ。

ある程度近づいて、弓を構えるセイ。

兎の首元目掛けて弓を打つ。

兎に弓が刺さる。

ウタリアン「セイ、すごいな！」

兎から弓を引き抜く。

ウタリアン「大きいイセポだな。苦しまずに送られてやれてるし、

はじめてにしては上出来だ。」

セイ「ありがとう」

微笑むウタリアン。

ウタリアン「帰ろうか」

### ○コシヤマインのコタン

ミナたち女性陣が、貝包丁で粟や黍やヒエを採集している。  
ウタリアン「おーい (OFF)」

声のする方を振り返るミナ達。

手を振るウタリアンと後ろを歩くセイ。

ミナ「ホシピアン (おかえり)」

二人の方に走るミナ達。

ウタリアン「見てくれ」

セイが兎を見せる。

ミナ「大きい！」

ウタリアン「大きいエペツケ (兎) だろ」

ミナ「初めての狩りでエペツケ仕留めるなんて凄いなセイ」

セイ「兎は得意なんだ」

褒められて照れるセイ。

笑い合う皆。

### ○同／食料保存チセ

敷物の上に鹿を置くウタリアン。

兎をその横に置くセイ。

奥の方からイナウと酒を持ってきて供える。

ぞろぞろとコタンの人達が集まってきて、お供え物を持ってくる。

それぞれ座る。

コシヤマインがカムイノミをする (神に祈る)。

終わって一斉に帰る。

コシヤマイン「セイ。よくこんな大きいイセポ (兎) を獲れたな。

初めてにしては上出来だ」

セイの頭を撫でるコシヤマイン。  
セイ「ありがとうございます」

チセが出るコシヤマイン。  
ウタリアン「はい(OFF)」

セイにマキリ(小刀)を渡す。  
ウタリアン「やったことあるか？」

首を横に振るセイ。  
ウタリアン「まずイセポ(兎)の解体からしよう」

兎をつかむウタリアン。  
ウタリアン「まずはここを(自分の首を指さし)マキリ(小刀)で切る」

兎の首にマキリを入れ、切るセイ。

血しぶきが上がる。

ウタリアン「切り方上手いな」  
セイ「だいたい、どこを切れればいいかわかる」  
ウタリアン「じゃあ次は皮を剥ごうか」

解体して肉と皮に分けられた兎。  
ウタリアン「次は鹿をやろう」

鹿の角を切るセイ。  
ウタリアン「鹿の角はあとでミナと所に持って行ってくれ。薬に使うんだ」  
セイ「わかった」

ウタリアン「セイは、ここに来る前どういう生活をしていたんだ」  
セイ「…物心ついた時には一人だったんだ。長く行き過ぎても  
本当につまらない毎日で。だけど、レラって子に出会ってから、毎日が  
本当に楽しかった。  
毎日が色づいていた。レラといった場所、感じた感情、全部憶えている」

涙が流れるセイ。  
セイ「ごめっ…」  
ウタリアン「謝るな…。その子も幸せだな。セイにそんなに思われて」  
セイ「…」  
ウタリアン「辛いこと思い出させたよな。」

このコタンは親族がほとんどだから、シサムのコタンの生活に  
興味があって」

セイ「いや…久しぶりにレラとの思い出を思い出せて良かった」

お互い微笑む二人。

セイ「そういえば、何でみんな日本語話せるの？」

ウタリアン「シサムとの交易が多いんだ。だから、小さい頃から日本語は聞いていたし、交易でシサムと関わるようになって

自然と覚えていった」

セイ「そうなんだ。すごいな」

笑い合う二人。

ウタリアン、鹿肉を切る。

ウタリアン「はい。これ食べてみて」

セイ「う…。うん。いただきます。(こそっと)」

セイ「…！美味しい」

ウタリアン「だろ？シサムはあんまり肉を食べる習慣がないんだっただよな」

セイ「うん…鹿は食べたことなかったから、今ので、すごい好きになった」

ウタリアン「それはよかった」

笑い合う二人。

### ○同／食料保存チセの外

ウタリアン「じゃあまたなあとで」

セイ「うん」

お互いのチセに帰る。

### ○ミナのチセ

セイ「ミナ」

返事がない。

セイ「ミナ」。鹿の角持ってきたけど…」

奥の方で寝ているミナ。

鹿の角を置く。

少し寒そうにしているミナにルウンペを掛ける。

頭を撫でる。

自分の部屋に向かうセイ。

### ○コシヤマインのチセ(夜)

食事の準備をしている村人たち

コタンC「あれ。ミナは？」

セイ「寝てます」

コタンD「そのまま寝かせてあげて」

セイ「：はい」

囲炉裏を囲み、炉縁に食器を並べる。

ヒシルエがみんなの食器をもらい、窯から食材を移す。

コシヤマイン「ヒンナ(いただきます)」

皆「ヒンナ」

ご飯を食べ始めるみんな。

ご飯を食べるセイ。

セイ「：(考え込む)」

コシヤマイン「その魚食べたことないだろ」

セイ「はい。はじめて食べます」

コシヤマイン「これはシペといってカムイが我々に与えてくださった

大切な魚なんだ。もうすぐ川に戻ってくる時期だから

今回はセイも一緒に漁に行こうか」

セイ「はい。ぜひ」

ウタリアン「楽しみだな」

セイ「うん」

ご飯を食べながら。

コシヤマイン「今日、ウカウ・シラルのやつから聞いたが、またシサムとの

揉め事があったらしい」

ヒシルエ「またですか：」

セイ「何か揉め事があったのですか？」

コシヤマイン「：数か月前にウカウ・シラルのコタンでシサムとマキリの

切れ味で口論になって、殺された者がいたんだ。その後から、

他のコタンでも、シサムとの口論が後を絶たなくなって、

交易でシサムが制限したりしてきたんだ。

我々に必要な鉄や儀式に使う物、沢山の物をシサムに頼っている。

不平等な条件にも我慢せざるを得ないが、度々こういう口論が起きるんだ」

セイ「…」

コシヤメイン「シサムに対する不信感が高まっているから、他のコタンに行くことがあれば、セイ。注意するように」

セイ「はい」

ウタリアン「もし、用事があれば言ってくれば一緒に行こう」

セイ「ありがとう。ウタリ…」

○コシヤメインチセの外

ミナの食事をもって、外にでるセイ。

檻の中の熊を撫でる。

ミナのチセに向かう。

○ミナのチセ

セイ「ミナ。起きてる？」

起き上がるミナ。

ミナ「ごめん…もう、みんなご飯食べた？」

セイ「うん。ミナに分。食べれる？」

ミナ「うん。ありがとう」

ご飯をゆつくり食べるミナ。

セイ「大丈夫か？」

ミナ「時々あるの。寝てればすぐ治るんだけど」

セイ「力の代償か？」

ミナ「多分そうだと思う」

セイ「…」

ミナ「そんなに気を落とさないで。大丈夫だから」

セイ「うん…」

ミナ「そうだ。一緒にユー（温泉）に入らない？」

セイ「ユー？」

ミナ「あれ？ユー（温泉）じゃないの？暖かい水に入るでしょ？」

セイ「…湯？」

ミナ「多分そう！近くに湯があるから一緒に行かない？」

セイ「いいね」

ミナ「よいっしょ。(よろける)おとと」  
セイ「大丈夫か！(ミナを支える)」  
ミナ「寝すぎたかも。行こうか」  
セイ「でも、まずこれ食べて性をつけて」  
ミナ「ありがとう」

ご飯を食べるミナ

## ○温泉

温泉のそばに、イナウと酒を捧げるミナ。

ミナ「ワツカウシカムイ エンキプヌイケシ(水の神様 私を助けてください)」

モレウを着て、温泉に入るミナ。

ミナ「セイ。そのテパ(禪)を着たまま入ってきて」

持っている新品の禪に履き替えて温泉につかるセイ。

セイ「はああああ」

ミナ「気持ちいい」

セイ「うん」

ミナ「時々、気分が良くない時に入りに来るの。ほら、湯って薬とも言うんでしょ？」

セイ「まー確かに」

ミナ「それに、ワツカウシカムイ(水の神様)に助けて貰ってる気がするの」

セイ「その通りだな」

空を見上げる2人。

ミナ「あ！ホヤウ！(竜)(さそり座を指さし)」

セイ「ホヤウ？」

ミナ「えーと…。シサム達がカムイとして崇めてる…」

がおおと竜のポーズをとるミナ。

セイ「獅子？」

ミナ「ううん」

セイ「麒麟？」

ミナ「違う気がする」

セイ「龍？」

ミナ「そう！あそこが、目で、あそこからまっすぐ伸びてるのが胴であそこら辺が手で」

セイ「うううん…わからない」

ミナ「そうか…あ！その下は、タマサイノチウウ（首飾り座）だよ」

脱いだルウンペの上にある首飾りをセイに見せる。

セイ「わからないかも」

ミナ「そっか…」

残念という顔をするミナ。

セイ「ミナ星見るの好き？」

ミナ「うん。好き。セイは？」

セイ「あまり好きじゃなかったんだけど、親友と見た星は凄く綺麗で、  
今でも鮮明に憶えてる」

ミナ「そっか…私もその景色見てみたい」

ミナの方を見るセイ。

セイ「いつか一緒にみよう。（空を見ながら）」

ミナ「うん…。見れるといいなあ」

空に流れ星が流れる。

## ○コタン／1月

雪が降り積もるコタン。

## ○コシヤマインのチセ／イオマンテ2週間前

イオマンテの準備で男性はイナウなどの用具、女性は酒造りや  
ご馳走づくりをしている。

## ○コシヤマインチセ／イオマンテ前日



[https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2005\\_12.pdf](https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2005_12.pdf)  
イオマンテ アイヌ民族文化財団から引用

図2のように並ぶ(祭主はコシヤマイン、コシヤマインの右横にヒシルエその横にミナ、コシヤマインの左にウタリアン、その横にセイ、炬を挟んで前には他のコタンから来た客人が並ぶ)

儀式用の衣装に代わっています

チエホロカケプ(逆さに削ったイナウ)を立てるコシヤマイン(図2参考)。

酒漉しの前に祈りが捧げる。

酒漉しを行う

村人総出でセイも教えて貰いながら行う。

莫塵を引くヒシルエ。

イオマンテ用に仕込んだ酒の中からオキ(炭)を取り出すコシヤマイン。

取り出したオキを炬の中に戻し、火の神(アペフチカムイ)に感謝の祈りを捧げる。

コシヤマイン「アイヌ語で感謝の祈りをする」

別の樽にサケヌンパニとよばれる棒を4本「井桁」に組んだものを置きザルをのせる。

仕込んだ酒をサケピサツクといわれる柄杓でザルにあげる。

ザルにあけたもろみを、手で擦り込むようにして漉す。

ザルをゆすつたり、ザルの底をこすつたりもする。

パッチとよばれる器を用意する。

シラリ（酒粕）はパッチに盛る。

ザルは洗わずに戸口に持っていく、戸口のそばの守り神であるアパサムシペカムイに祈りを捧げながら、ザルを当てて、附着した酒粕を落とす。

その後道具を洗う。

### ○コシヤマインチセ／玄関

酒漉しに使ったザルなどの道具を洗い終わったタライの水を玄関先にまく。

水をまいた村人たち「戸口の神様も、近くを往来する神様も飲みたい神様がいたら、どうぞみんな分けて飲んでください。」

（アイヌ語にするか検討）

### ○コシヤマインチセ

再び樽をゴザで覆い、神窓の左座に置くセイ。

拍手を貰うセイ。

セイの頭を撫でるウタリアン。

照れ笑いをするセイ。

## ○同／熊の檻の前（夜）

熊の檻の前で豪華なご飯を食べる熊を見ているセイ。

セイ「今日でお前ともお別れか。カムイモシリ（神の国）に帰るんだろう。」

悲しそうに熊の方を見るセイ。

セイ「…」 ご飯を食べるのを辞めて、セイの方に近づく熊。

熊を撫でるセイ。

セイ「もし向こうで、レラっていう女の子に会えたら、セイは元気だよって伝えてくれ」

ミナ「セイ〜どこいった〜（OFF）」

セイ「は〜い！またな」

チセの中に戻るセイ。

## ○コシヤマインチセ

ミナ「セイ。こっち」

ウタリアンの横に座るセイ。

## イオマンテ前夜祭

### 事前準備

アペオイ（炬）の四隅にはイヌンバストウイナウ（酒漉しイナウ）が1本ずつ立てられ、チエホロカケブ（逆さイナウ）が祭主の座近くのアペオイ（炬）の隅に立てられます。アペエトク（図1参考）には、チタラペ（文様入りのゴザ）が敷かれ、その上にシラリ（酒粕）の入ったパッチ（お椀）、キケパラセイナウとキケチノイエイナウが各1本、チエホロカケブ（逆さイナウ）1本を載せたオツチケ（膳）、トゥキ（お椀）とパスイ（捧酒箸）を載せたオツチケ（膳）が用意され、その後方に漉した酒が入った樽が置かれます。

イヨマレクル（酒を注ぐ人、女性が行う）が酒樽から酒をエトウヌプ（片口）に移す。

それを持って祭主の所に行き、トウキに酒を注ぐ。

続いてシソ側に座る人に注ぎ、次にハラキソ側の人に注ぐ（図1参考）。

コシャマインがシラリ（酒粕）をチエホロカケプイナウ（逆さいナウ）とイヌンパストウイナウ（酒漉しイナウ）の頭に載せる。

同じく対面に座る男性がイヌンパストウイナウにシラリ（酒粕）を載せる。

アペフチカムイにパスイ（捧酒箸）でシラリを捧げる。  
（良い酒ができたことを報告）

コシャマインがトウキ（お椀）を持ち、キケウシパスイ（捧酒箸）の先に酒をつけ、アペフチカムイに捧げながら祈る。

他の男性たちも同様にイクパスイに酒をつけ、上座に置かれたイナウなどに捧げながら祈る。

祈りの途中、ウタリアンがチセコロカムイ（家を司る神）、イレスプンキヨカムイ（家族を育て見守る神）、イソプンキヨカムイ（漁獵を見守る神）のところに行って祈る（北東の角）。

セイがアペオイ（炉）に立てられたイヌンパストウイナウを2本持ち、アパサムシカムイ（戸口の神）に捧げる。

他の人は、祭主から命じられた重要な神々にその場で祈りを捧げる。

### ○コシャマインチセ外

祈りが終わると、ウタリアンとセイが外に出てロルンピヤラ（東窓）の前に行く。

他の男性がロルンピヤラ（東窓）からキケバラセイナウ、キケチノイエイナウ、イクパスイ（捧酒箸）、酒の入ったトウキ（お椀）各1個をロルンピヤラ（東窓）からウタリアンとセイに手渡す。

2人はオンカミ（拝礼）しながら受け取り、ヘペレセツ（子熊の檻）へ向かう。

上部に上がる。

へペレセツ（子熊の檻）の横木に向かつて、左側にキケパラセイナウ、右側にキケチノイエイナウを立てる。

### ○コシヤマインチセ

コシヤマインコタンの男性がイナウキケ（削りかけイナウ）を手に取る。ロルンプヤラ（東窓）上部の両端、アペオイ（炬）の中央部など、主だった所に結び付ける。

へペレセツ（子熊の檻）にイナウをつけたウタリアンとセイがチセに戻る。

コシヤマインコタンの男性が古老たちに酒を注ぐ。

古老たちはその酒を飲む。

ヒシルエに渡す。

女性たちはアペフチカムイや炬鉤につけられたイナウなどに酒を捧げた後自分たちも飲む。

コシヤマイン「イレスカムイ。ウパセカムイ。アペフチエカシ。  
ヌワンオロワノ ウポンノ ポンノ クイタクコロカ  
タントアナクネ ニシパトウラノ タパンペネノ  
ウパセカムイ ウコツチャケタ クイタクキナ  
ウピリカアヌ アキパキワ タネオロワノ  
ニサツタパクノ アキチイノミ イノミ ネヤツカ ウネプネヤツカ  
カムイウタリ ウピリカヌカラ アキパキワ アプンノカネ  
ホピタクニ インカラアンクニ アタナンアイヌ アイヌネマヌプ  
クネプネコロカ タパンペネノ クイエパキナ

（育ての神 重い神 火の媪神、翁神よ 昨日から少しずつ  
私は申し上げていますが 今日立派な方々と私の甥たちとともに  
（若い者たち）このように重い神のおん前に申し上げますから  
よく聞いて下さって今から明日まで私たちのする祈り 祈りでも  
何でも 神々がよく見守って 下さって 無事に終わるように  
見守ってくださいるようにただの人間 人間というもので 私はありませんが  
このように 申し上げるのです。以下中略）

クイエパキコロ クイタク オケレ クイエハウエネ  
（申し上げて 私は言葉を収める のでございませす）

立ち上がるコシヤマイン。

コシヤマイン「皆。今日は集まってくれて感謝する。明日からの

イオマンテのために今日は、食べて飲んで、宴を楽しもう  
じゃないか。」

皆「おおー！！！」

コシヤマインのチセの中で、飲み食いする人たち。

クリムセ（弓の舞）を行う（セイも混ざる）。

イヨマンテリムセ（イオマンテ踊り）をする女性たち（ミナやヒシルエも）。

### ○熊の檻の前／イオマンテ当日

へペレセツ（子熊の檻）に上がるウタリアン。

カムイの胴体と首にトウシ（網）を2本結びつける。

熊を檻から出すコシヤマイン

他のコタンからきた村人とコシヤマインのコタンの村人（全員男）が  
それぞれトウシ（網）をもって熊を囲むように配置し、

熊を中央にある、ヤシケオクニ（カムイを結ぶ棒）へと誘導。

セイとウタリアンと他のコタンからきた村人（男）がそれぞれ  
タクサ（お祓いの棒的な）を持ち、熊を囲いながら上下に振る。

時々、タクサ（お祓いの棒的な）を持った3人が、熊の顔や体に当てる。

その間女性たちが手拍子をとりながら「ホイヤーホッ、ホイヤーホッ」と  
掛け声を発する。

熊をヤシケオクニに繋ぐ。

ヤシケオクニに繋ぐトウシは、後方のトウシを使用。

女性たちが熊を取り囲み、リムセ（輪踊り）を踊る。

輪の内側には、ヤシケオクニに繋がれた熊、前方の2本のトウシを

持った男性、タクサを持ったウタリアンがいる。  
熊とヤシケオクニを繋いでいたトウシを解き、会場を歩かせる。  
ロルンプヤラ（東窓）の下を通って、ポンヌサの横に座っている古老の手前まで行き、そこで方向を変え、ヌサの前を通ってヤシケオクニまで行く。（このルートを何度か周る）



[https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2006\\_14.pdf](https://www.ff-ainu.or.jp/manual/files/2006_14.pdf)

アイヌ民族文化団体 先祖供養から引用

女性たちの掛け声はウポポ（歌）に変わっている。

3回目に熊が古老の近くに来た時、古老たちは熊にへペレイ（花矢）を射る。

興奮する熊。

往復しているうちに、だんだん熊が疲れて動きが鈍くなってくる。

頃合いを見計らって、ヌサの前にトドマツの枝葉を敷いて、その上にイヌンパニ（熊の息の根を止める丸太）を置く。

熊をうつぶせに寝かせ、首をイヌンパニの上にのせ、両手も前方にのばしてイヌンパニの上に置く。

イヌンパニのもう一方の木を首の上に渡し、男性たちが左右3人ずつのって首をしめ、絶命させる（コシヤマイン、他のコタンの村長）。

カムイに向かって祈りを行う。

トゥキ（お椀）が古老に渡され、エトウヌブ（片口）で酒が注がれる。

他の男性たちにもトゥキ（お椀）とイクパスイ（捧酒箸）が渡され、酒が注がれる。

イクパスイでカムイの口元に2〜3回ほど酒を捧げて祈りの言葉を言う。

コシヤメインがパツチ（お椀）から団子とクルミを取り、座ったままカムイの両側と後方に撒く。

ウタリアンとセイが団子をいっぱい持って家の屋根に登り、家の東側（ヌサ側）に団子を撒く。

参加者が手を上げ、歓声を上げながら拾いあう。

セイが弓を持つ。

ウタリアンの方を見るセイ。

頷くウタリアン。

覚悟を決めて東の空に向かって、ヘペレイ（花矢）を射る。

矢が高く飛ぶ。

### ○コシヤメインのチセの中

解体されたカムイが安置された場に古老が座り、カムイノミ（祈り）が行われる。

（ここまで、ウポポ（歌）が背後で流れている）

集まった人々に食べ物や飲み物が振舞われ、饗宴がはじまる。

沢山の人達の笑い声と歌。

宴会中、ミナがセイを外に行こうと誘う。

○コシヤマインのチセの外

雪の中を歩く二人。

ミナ「んん…(寒い)」

セイ「寒いな」

ミナ「うん」

セイ「それにしても、凄いな。イオマンテ？だっけ」

ミナ「うん。キムンカムイ(熊の神)への感謝と再訪を願う大切な儀式なの。

私もまだ3回しか経験がないんだ」

セイ「そうなんだ」

ミナ「セイがいた所にもあった？」

セイ「隣村に神社、神様が祀られている社があって、毎年そこで大きいお祭りがあ  
るよ」

ミナ「へー。きつと素敵なんだろうな」

セイ「神輿っていう神様の乗り物を担いで、村中を回るんだ」

ミナ「実際に見てみたら、迫力がありそう」

セイ「本当に凄いや！何年前からあるんだろうって思うくらい古くて、  
でも鮮やかで、こーんなに大きい(手を広げながら)」

笑うミナ。

ミナ「もっともっと、セイの居た村のこと教えてよ」

セイ「いいよ。それでね、ここには無い野菜もあるんだ。

色鮮やかで、身がふっくらしていて」

ミナ「美味しそうだね」

セイ「とっても美味しいよ」

2人の笑い声。

夜空で星が輝く。

○コシヤマインのチセの中／翌日、イオマンテ続き

前日に迎え入れた熊の頭部を解体し、飾り付けを行う。

口の周りと耳を頭骨に残すように皮を剥ぐ。

←このような状態にする。



写真34

上座に移し、カムイノミ（祈り）を行う。

ユクサパオニ（二股の木）に熊の左右の孔をはめ込むように入れ、ユクサパオニに取り付けた横木に顎が掛かり、収まるようにする。

ユクサパオニ（二股の木）の左右にキケチノイエイナウを

ヤナギの皮で縛り付ける（雄熊なので、左のイナウを高くする）。

着物を着せるなど、飾り付けを行う。

ロルンプヤラ（東窓）から外に出す。

女性たちが、「ホイヤーホツ、ホイヤーホツ」と掛け声をかける。

古老の一人がユクサパオニを持ち、アペオイ（炬）の  
アペフチカムイ（火の神）にお辞儀をするように何度か揺らす。

外で、男性たちがロルンプヤラ（東窓）の近くでオンカミ（祈り）  
しながら待つ。

コシヤマインがユクサパオニを受け取り、ヌサの前に運ぶ。

何度か揺らしながら、正面を東（ヌサの後方）に向けてヌサの中央に  
立たせる。

同時に、ウタリアンが東の空に向けてヘペレイ（花矢）を放つ。

（女性たちはまだ掛け声をしている）

○コシヤマインのチセの外／シンヌラツパヌサの前（p41の図参考）

男性たちが座り、トウキ（お椀）に入れた酒をイクパスイ（捧酒箸）の先につけ、前方、横、後ろ、三方へ振り撒くようにして捧げる。

先祖の名前をぶつぶつ言いながら供える。

ミナ「亡くなった親友のことを呼びながら、お供えしてあげて。」

レラと唱えながら、トウキ（お椀）に入れた酒をイクパスイ（捧酒箸）の先につけ、前方、横、後ろ、三方へ振り撒くようにして捧げるセイ。

合掌し祈るセイ。

女性たちも続いて、ご飯や団子、果物などをちぎって前方に撒くようにして供える。

○コシヤマインのチセの中／夜

カムイノミ（祈り）のために、炬を囲んで座る人々。

（最初のカムイノミと同じメンバー）

コシヤマイン「イレスカムイ ネヒサマタ チセコロカムイ

コタンコロカムイ タネポカネ クイタクキナ」

（育ての神 さらにまた 家の神 村の神 今また 申し上げます）

以下中略

コシヤマイン「イレスカムイ カムイウタリ イヤイライケレ

（育ての神 神々よ 有難うございます）

コシヤマイン「皆。3日間に渡ったイオマンテが終わった。

ウカウ・シラルの皆も遠い所からありがとう。カムイも

大変喜ばれ、また来てくれるだろう。

また、ここに皆で集まれることを祈って、終わりとする。」

拍手喝采。

皆を見送るセイ達。

コシヤマイン・ウタリアン・ヒシルエ・ミナと他コタンの村長達が残り、  
炉を囲む（重苦しい空気）。

横目にチセに帰るセイ。

### ○ミナのチセ

寝る準備をするセイ。

コシヤマイン「セイ（OFF）」

コシヤマインとミナが立っている。

コシヤマイン「こんな時間に申し訳ないが、ちょっといいか？」

セイ「はい」

外に出るコシヤマイン。

追いかけるセイ（ミナはチセに残る）。

### ○コシヤマインのチセ

シソに座る2人（p35参考）。

コシヤマイン「疲れているところ、申し訳ないな」

セイ「いいえ」

コシヤマイン「ここでの生活は慣れてきたか？」

セイ「はい。イオマンテもとても素敵でした。僕の村とは違う儀式を見れて

楽しいです」

コシヤマイン「そうか。それは良かった…」

セイ「…？」

コシヤマイン「だが、もう村に帰った方がいい」

セイ「…」

コシヤマイン「雪が完全に溶けたところ、私たちはシサムに対して戦いを

挑むことを決めた。ウカウ・シラルのコタンだけでなく、

秘密裏に情報を共有し、一斉にシサムの館に攻撃をする。

セイ。お前を戦いに狩りだそうなどは考えていない。

ただ、ウタリもミナもこの戦いに行く。いつ帰って来れるかも

生きて帰って来れるかもわからん」

悔しそうな顔をするセイ

コシヤマイン「遅かれ早かれ、いつかは起こることだったのだ。

セイには辛い思いをさせてしまう。だから、皆が戦いに行く前に

ここを去った方がいい」

セイ「…女のミナも戦いに行く必要はあるのですか」

コシヤマイン「ミナには戦士の治療をしてもらう必要がある」

セイ「そうしたら、ミナが死んでしまうではないですか！」

黙るコシヤマイン

セイ「コシヤマイン様は知っていたんですね。ミナが自分の體を犠牲に

あの力を使っていることを」

コシヤマイン「私だけではない。コタンの皆知っている」

セイ「…。なのにミナの治療を止めなかったのですね…。

利用していたのですか」

コシヤマイン「そんなことはない！仕方がなかったんだ…」

立ち上がって帰ろうとするセイ。

コシヤマイン「待て（セイの腕をつかむ）」

腕を振り払おうとするセイ。

コシヤマインの力が強く、腕が抜けない。

コシヤマイン「いいか。ここに残ればきつと、辛い思いをする。

戦が始まる前に、ここを去るんだ」

セイ「…。（悔しそうに）」

手を振りほどき、ミナのチセに戻る。

### ○ミナのチセ

セイ「ミナ！」

ミナを起こすセイ。

ミナ「ん…（起き上がる）」

セイ「ミナ。ここから逃げよう。戦になんて行っちゃダメだ」

ミナ「コシヤマイン様から聞いたんだね」

セイ「今まで、ずっと皆のために自分の體を犠牲にして、戦にまで行くなんて、

そんな酷いことないじゃないか。もう逃げようミナ」

ミナ「…私が行くって言ったの」

セイ「なんで…」

ミナ「コシヤマイン様に救って貰ったあの時、私はこの體をコシヤマイン様に

捧げると誓ったの」

セイ「それでも、今のミナの状態だったら…」

言わずらそうにするセイ  
セイ「もう帰って来れないじゃないか…もう親友が死ぬところを見たくないんだ…」

セイを抱きしめるミナ。

ミナ「セイには辛い思いをさせてしまうことはわかっている。ごめんね。でも、私ね。セイと会う前は、體がどんどん衰えていくことを感じていつ死ぬんだろう、お父さんとお母さんにいつ会えるんだろうってそんなことばかり考えていた。でも、セイが来て、毎日が凄く楽しくて、知らないことを沢山知れて、世界はこんなに広いんだって思えた。コシャメイン様に戦のことを知らされて、残るか行くか聞かれた時に、一瞬、死にたくない。セイともっと一緒に居たい、色んな所に行きたいって思ったの。私の心は、こんなにも人間らしくなっちゃったんだって」

セイを見るミナ。

ミナ「そう思えただけでも、幸せなの（涙を流しながら）」

泣きながらミナをまた抱きしめるセイ。

泣き合う二人。

二人で寝転んでいる。

セイ「やっぱり、行かないって選択肢はもうない？」

ミナ「うん。最後までコシャメイン様と戦う」

セイ「そっか…悔しいけど尊重するよ。ミナがそう決めたなら」

ミナ「ありがとう。でもセイは帰っても良いんだよ」

セイ「ううん。帰らない。ミナ達が帰って来るまで、見届けたい」

ミナ「…ありがとう」

抱き合って寝る二人。

## ○回想（思い出が流れていく）

### ○チセの外／昼

子供たちと遊ぶセイ達（アカムカチュ（輪突き））。

○女性のチセ

女の人達の刺青に立ち会うセイ（痛そうな顔をするセイ）。

○妊婦のチセ

出産に立ち会うセイ達（コシヤマイン以外は外に出て見守っている）。

○コシヤマインのチセ

男性たちが矢をつくる。

毒づくりをする。

トリカブトの葉の上に乾燥させたトリカブトの根の一部を載せ、舌に乗せるウタリアン。

頷くウタリアン。

セイもやってみる。

舌がピリピリして身震いをする。

乾燥したトリカブトの根を砕き、水分を加え泥上にする。

矢に毒を塗る。

○裾野付近

鹿狩りに行く。

狩りで矢の試し打ちをする。

○コシヤマインチセ／昼

ヒシルエ達とお守りをつくる。

○同／夜

ご馳走と酒で盛り上がる。

舞を舞う女性たち。

ミナとセイの笑い合う姿。

### ○コシヤマインのチセの外／早朝

大量の弓と毒と食料を持って、チセから出るコタンの人達。

全員新品のルウンペ（服）を着て戦に行く人達が並ぶ。

コシヤマイン「私らが居ない間、このコタンを頼んだよ」

頷くコタンの人達。

コシヤマインにお守り袋を渡すヒシルエ。

ヒシルエ「必ず戻ってきてくださいね」

コシヤマイン「ああ」

ヒシルエを抱きしめるコシヤマイン。

他の女性たちも、男性たちにお守り袋を渡し、抱き合う。

お守り袋をウタリアンに渡すセイ。

セイ「絶対に帰って来い！」

ウタリアン「しめっぽい顔するな。絶対帰る（セイの頭を撫でながら）」

ミナの前に行くセイ。

エカエカ（女性用のお守り）を渡す。

セイ「ヒシルエと一緒に編んだんだ」

エカエカを受け取り、手首に巻く

ミナ「ありがとう！（満面の笑み）」

セイ「ミナ。さよならじゃないよ。待ってるから」

ミナ「うん！（悲しそうに笑う）」

コシヤマイン「セイ。君は亡くなった親友との約束がある。危険だと思ったら、すぐに帰るんだ」

セイ「はい。でも、皆さんの帰りをここで待っています。」  
コシヤマイン「必ず戻ってくる」

セイの頭をぐしゃぐしゃと撫でる

戦に行く人達が並ぶ。  
コシヤマイン「行ってくる」

志海苔館に向かって歩くコシヤマイン達。

子供がお父さんに向かって走ろうとする。

コタン子C「待ってー！」

コタンC「ダメよ！」

子供を引っ張る。

戦に行く皆を見送るセイ達。

テロップ「1457年5月17日」

### ○志海苔館付近（朝）

大軍を率いて志海苔館の付近へと進む（テロップFO）。

歩みを止め、ウタリアンが矢を志海苔館に向けて放つ。

コシヤマイン「我々はカムイと共に！」

一氣に志海苔館に攻め入る男たち。

### ○志海苔館外

和人たちが慌てて日本刀を取り出す。

和人A「お主ら蜂起とは何事じゃ」

弓矢で殺される和人A。

和人B「おのれ」

日本刀を取り出し襲いかかろうとするが、弓矢で殺される和人B。

和人とアイヌ達の争いが続く。

ケガした兵士の治療にあたるミナ。

ケガが治るとすぐに戦に向かう兵士たち。

和人C「なぜ、一向に数が減らんのだ」

不思議な力で治療するミナを見つける和人D。

和人D「あ、あそこに、奇妙な能力で治療をする女子（おなご）がおるぞ」

目を細めてミナの方をみる和人C。

和人C「なんだあれは！」

和人D「女子を殺すには少々気分が悪いが」

ミナに向かって刀を抜く和人D。

目をつむるミナ。

刃物が止まる音がして目を開けるミナ。

アイヌの2人がミナをエムシ（刀剣）で守る。

アイヌA「ここは、任せて治療に専念するんだ」

ミナ「ありがとうございます」

戦う和人CDとアイヌAB。

### ○志海苔館中

コシヤマインとウタリアン達が小林良景のいる間に着く。

小林良景と配下が立っている。

小林良景「やあやあ。吾こそは、北条の被官として津軽に来住し、

志海苔館の館主をめえぜられた、小林太郎左衛門尉良景

（こばやしたろうさえもんのじょうよしかげ）なり腕に覚えの者よ、  
手合わせ願う！」

コシヤマイン「吾は、ウスケシのコタンコロクル（村長）コシヤマイン。  
殺された同士の恨み。ここで果たす！」

コシヤマインvs小林良景。

ウタリアンとその他vs小林の配下。

### ○志海苔館の外

アイヌ達vs和人。

必死にケガを治すミナ。

戦場が激戦化する

### ○コシヤマインのチセ(夜)

レラの形見のお守りを持って、皆の帰りを祈るセイ。

空を見上げるセイ。

志海苔方面から煙が上がっている。

ブラックアウト

テロップ「1458年12館のうち残り2館」(一説には6月20日らしい)

### ○七重浜付近(昼)

花沢館館主武田信広(たけだのぶひろ)にとその配下達に攻め入られる  
アイヌの兵士達。

アイヌC「コシヤマイン様、ウタリアン様、ミナ様。ここは、私たちが

引き留めますので、早くお逃げください」

ミナ「ケガ人はどうするのですか(両目が殆ど見えてないので、目線合わない)  
アイヌD「ケガ人のことは後回しで良いです!コシヤマイン様達を

お守りください!」

悔しい顔をするミナ。

ウタリアン「ミナ。行こう」

ミナ「…」

ミナの手を引っ張って、七重浜に向かって走る。

(ミナは體の機能が殆ど機能していないため、足がおぼつかない)

セイから貰ったお守り袋が落ちる。

### ○七重浜

三人が七重浜に追いやられる。(この時点で、ミナの手から  
エカエカ(ミサンガ)が消えてる)

武田信広が馬に乗って、三人を追いかけてくる。

馬から降りる武田信広。

じりじりと近づく武田信広。

武田信広「吾は花沢館館主蠣崎季繁様（かきざきすえしげ）からお前たちを鎮めるために名を賜った、武田信広（たけだのぶひろ）なり。」

不思議な力を持つ女子（おなご）よ。私は、女を殺す趣味はない。立ち去れ。」

ミナ「…この體はコシャマイン様に捧げると決めた。命尽きるまで私は戦う」  
武田信広「…なら、覚悟を決めろ」

ミナに向けて矢を向ける武田信広。

武田信広に向かってエムシ（刀剣）で切りかかろうとするウタリアン。

ウタリアンに向けて矢を射る武田信広。

心臓に矢が刺さるウタリアン。  
ミナ「ウタリ！」

急いでミナがウタリアンを治す。

一命をとりとめるウタリアン。

血を吐いて倒れるミナ。  
ウタリアン「ミナ?!」

ミナ「ウタ…リ…（吐血）」

ウタリアン「もう何も話すな！」  
ミナ「い…きて…」

絶命するミナ。

ウタリアン「ミナ。ミナ！ミナ！」

武田信広に向かって矢を放つウタリアン。

刀を交わっていたコシャマインを突き放し、飛んできた矢を刀で切る  
武田信広。

ウタリアンに向かって弓を放ち、絶命させる武田信広。

後ろから来たコシャマインが放った矢も短刀で切る。

コシヤマインにも弓を放つ。

コシヤマイン、ウタリアン絶命。

馬の方に戻り、馬に乗って、元の道に戻る武田信広。

○同

空が夕暮れになり、夜になる。

武田信広の奇襲に難を逃れたアイヌの兵士達が、七重浜で三人の死体を見つめる。

アイヌE「コシヤマイン様！」

アイヌF「息はあるか！」

アイヌE「ない…」

アイヌG「ウタリアン様もミナ様にも息がない」

アイヌE「くそっ…」

悔しがるアイヌの兵士達。

アイヌF「ここで悲しんでいる場合じゃない！サンベ、チカフレ、パセクル！

(コシヤマインの村の者 パセクルは体重の重い人という意味)

ここは俺たちに任せてお前たちは、コシヤマイン様達を、ウスケシのコタンに運べ！」

頷く三人。

それぞれ、コシヤマイン、ウタリアン、ミナの死体を担いで、ウスケシに向かう三人。

アイヌF「コシヤマイン様達の命を無駄にするな！最後の力を振り絞れ！」  
アイヌ達「おお！」

茂別館に向かうアイヌの戦士たち。

○コシヤマインのチセ(三人が出発して三日後の昼)

畑に生えている粟、ヒエなどを採取しているセイ達。

コタン女Aがミナ達の死体を担いで、帰ってくる三人

(サンベ、チカフレ、パセクル)を見つめる。

コタン女A「ちよっ。あれ…」

振り返るセイ。

セイ「ミナ達の死体を担いでいる三人。  
セイ「ミナ…」

道具（穂つみ用に作られた貝の道具）を捨て三人に駆け寄るセイ。  
コタンC「ヒシルエ様！（OFF）」

他のコタンの人達もセイに続き、三人に駆け寄る。

ミナ達の死体を土に置く三人。

俯く三人。

サンペ「間に合わなかった…」

セイ「ミナ。ミナ…」

ヒシルエとコタンCと死を伝えに行った古老（男）二人も駆け寄る。  
ヒシルエ「あ…ああ」

コシヤマインとウタリアンを見て、声を上げて泣くヒシルエ。

それを見て泣く皆。

セイ「ミナの腕にエカエカ（ミサンガ）がなく、お守り袋もないことに気づく。  
セイ「お守り…どこに落としたんだよお…」

ミナのルウンペに血がついているのを見るセイ。  
セイ「痛かったよな。苦しかったよな。よく頑張った」

声を上げて泣くセイ。

皆で声を上げて泣く。

### ○コシヤマインのチセの中（夜）

チセの戸口を入った左側の炉の下手に、頭を上手側に向けて、仰向けに  
安置されている三人の死体。

死者には、一番高級なルウンペ（冬服）で裏表逆に着せられ、  
白い布が顔にかけられる。

ミナの胸にはタマサイ（ネックレス）が置かれている。  
一礼をして泣きながら死体の肩から胸を撫でるコタンの人々。  
ミナの肩から胸を撫でるセイ。  
声を出すのを我慢して泣くセイ。

○コシヤマインのチセの中／翌日昼

ご馳走が並ぶチセ内。

正装を身につけられている三人。

レクトウンベ（魔除けの首飾り）を付けられる。

死体を包む用の莫蔭で死体を包む。

（七本の木製の止め串に紐を引っ掛け、紐が交差するようにして縛る）

特別に編んだ紐でゆるく結ぶ（少し引っ張ると解ける程度）。

別の紐で棒に繋ぐ。

家の戸口から、死者の足から先に出す。

○チセの外／墓地

クワ（墓標）を持った人↓死体を運ぶ人（男性2人ずつ）↓  
副葬品を持つ人↓村人たちの順で、墓まで歩く。

（ヒシルエはコシヤマインの墓標、セイはミナの墓標を持つ）

（この時、ヒシルエは、頭を丸刈りにし、チシコンチ（泣き頭巾）を被って着物は裏返しになっている）

身長と同じサイズに掘られた穴に死体を入れる。

副葬品はその場で乱暴に鎌で壊してから入れる。

村人たちが土を被せる。

最後に、クワ（墓標）を持つものが、墓に刺す。

ミナの墓にクワを刺すセイ。

墓の上から水をかける村人たち。

古老がヨモギと笹の葉の束を激しく振りながら  
「フツサ、フツサ！」と大きな呪声をかける。

一礼してチセへ戻る村人たち。

後ろを振り返ろうとするセイ。

ヒシルエ「振り返ってはダメよ」  
セイ「…」

悲しい顔をするセイ。

チセへと戻る村人たち。

### ○ミナのチセ（夜）

ミナの居ないチセで、ミナのことを思い、泣いているセイ。

シャナ「セイ様（OFF）」

振り返るセイ。

シャナ「何も聞かず、冬服に着替えて付いてきて下さいますか」  
セイ「…うん」

### ○山

獣道を進むシャナとセイ。

洞窟へとたどり着く。

油を付けた木に、石をカチカチと擦り、摩擦で火をつける。

洞窟に入る二人。

### ○洞窟の中

どろどろ歩いていくシャナとセイ（会話はない）。

壁には、古代の絵が描かれている（角が生えた人や北海道異体文字など）。

歩みを止めるシャナ。

シャナ「私は、ここから先には行けません」

セイ「…」

シャナ「この先には、死者が行くポクナモシリの入り口があります。

きっとミナ様達も居るはずです。

そして、これだけは守って下さい。向こうの食べ物は一切

口にはしてはいけません。あと、あまり長居はしないで下さいね…」

ぺこりとお辞儀して、元来た道を帰ろうとするシャナ。

セイ「シャナ！」

振り返るシャナ。

セイ「ありがとう」

笑みを浮かべるシャナ。

シャナ「ミナ様によろしくお伝えください」

ぺこりとお辞儀して歩みだすシャナ。

### ○同／さらに進んだところ

だんだんと天井が低くなる洞窟を歩むセイ。

四つん這いにならないと歩けなくなる。

段々と光が見えてくる。

時折、冷たい冬の風が吹く。

セイ「寒い」

四つん這いで進むセイ。

出口が見える。

洞窟を出る。

### ○ポクナモシリ／昼・冬（死者の国はあべこべ）

一面雪景色で驚いて立ちすくむセイ。

きよろきよろする。

ミナ（葬式に着せられたルウンペ）と思わしき人物が、水を汲んでいる。  
セイ「ミナ！」

ミナに近寄る。

声に振り向くミナ。

ミナ「セイ…？（死者には生者の姿は見えない）」

セイ「ミナ！セイだよ！セイ！」

ミナ「セイ？本当にセイなの？どこ！どこにいるの！」

セイ「もしかして姿が見えてないの？」

ミナ「うん。どこにいるの！（目線が合わない）」

悲しい表情を浮かべるセイ。

戦死したアイヌA「おい。ミナ。誰と話している」

ミナ「独り言！！！」

戦死したアイヌA「ずいぶんデカイ独り言だね！（OFF）」

ミナ「…セイ。こっち来て」

セイ「うん」

川の向こう側にあるちよつとした草むらに向かう。

### ○川付近の草むら

ミナ「ここなら、誰にも見つからないでしょう」

岩に腰掛けるミナとセイ。

ミナ「本当にセイなんだね！姿は見えないけど、声で直ぐにわかったよ」

セイ「ちよつと疑ってたくせに」

拗ねるセイ。

ミナ「ごめんごめん。だって、声だけだから、悪霊だったら嫌だなんて」

むすーと拗ねるセイ。

ミナ「でも、セイどうやってここに来たの？」

セイ「シャナが連れて来てくれたんだ」

ミナ「シャナらしいな」

ハハハと笑うミナ。

ミナ「セイとまた会えて本当に嬉しい。それだけが心残りだったから」  
セイ「僕もミナに会えて嬉しいよ」

ミナ「コタンの皆は元氣？」

セイ「うん。元氣だよ。みんな頑張って前に進もうとしてる」

ミナ「そっか：良かった」

黙る二人。

ミナ「すごい怖かった。見たこともない武器で切りかかってきて、

私の治療が遅れた人たち皆死んでしまっ」

黙って聞くセイ。

ミナ「シサムの主将に私だけ立ち去れって言われた時、一瞬、コシヤマイン様とウタリを見捨てて、コタンに帰ろうと思った。けど、最後まで戦ったの。ねえセイ。私頑張ったよね？」

泣きながらセイに問うミナ。

ミナを抱きしめるセイ。

セイ「頑張ったよ。ミナは本当によくやったよ」

ミナ「私達のしたことは決して無駄なんかじゃないよね」

セイ「うん。ミナの死も、ウタリの死も、コシヤマイン様の死も。

自分たちの命をかけてこの誇り高き文化を守ろうとした皆の死は

絶対に無駄なんかじゃない！」

ミナ「うん。うん。ありがとうセイ…」

涙を拭いてニッコリ笑うミナ。(セイと目が合ってる)

ミナ「私、ここに来てから、目も視えるし耳も聞こえるようになって、

すごく体調も良いの。少し、遊ばない？ 私セイと思いつきり走るのが

夢だったの」

セイ「いいね」

立ち上がって、走るミナ。

追いかけるセイ。

動物たちと一緒に走る二人。

かくれんぼする二人。

雪合戦する二人。

笑い合う二人。

### ○洞窟の前／夜

セイ「もう行かなきゃ」

ミナ「そっか。本当にお別れだね」

セイ「うん」

悲しみながら笑う二人。

ミナ「セイ。私の顔と同じ目線になるまで、かがんでくれる？」

セイ「うん。いいけど」

かがむセイ。

ミナ「かがんだ？」

セイ「うん」

セイにキスをするミナ。

セイ「…!!」

赤面するセイ。

ミナ「一生忘れないお土産！（満面の笑み）」

セイ「絶対忘れない！（満面の笑み）」

振り返り、洞窟に向かうセイ。

セイ「ミナ！じゃあね！」

ミナ「ばいばい！！！」

笑顔で手を振る二人。

洞窟の方を見るミナ。

一瞬セイの後ろ姿が見える。

びっくりするミナ。

セイ「セイ。好きだよ。（呟くように）」

### ○洞窟中

元来た道に戻るセイ。

涙を拭きながら歩く。

歩くセイの足元。

時間が進む（歩きながら、背景と服装が変わる、足元のみ）。

### ○とあるの村（夕暮れ）／時は現代

かつて祠が合った場所に稲荷神社ができています。

九本のしつぱを持ち、神として祀られているセイ。

山の上から、変わった街の風景を見るセイ。

（前の村の景色がF Oして、現代の街並みがF I）

レラの小屋があった場所に行く。

（レラの小屋F O、何もない更地F I）

悲しい表情を浮かべるセイ。

無縁仏化したレラの墓に手を合わせるセイ。

### ○同／昔レラと星を見た山頂

景色を見て、思い伏せているセイ。

？「こんにちは。（OFF）」

驚いて振り返るセイ。

一人の女子高校生が立っている。

？「ここにこんな所があったなんて。」

セイ「私が見えるのか…？」

？「あー。私、そういうの敏感なので。」

ハハハと笑う？

？「本当にここから眺める景色は綺麗ですね」

セイ「…夜になると星が綺麗に見えるんだ。あの時と変わらず。」

空を眺めるセイ。

？「よければ、一緒に見ませんか？星」

セイ「え…。」

？「私、ここに越してきたばかりで、友達も居なくて。もしよかったら、

友達になつて欲しいよなんて」

はにかむ？。

セイ「…うん。星だけじゃない。色んな景色を一緒に見よう。いつでもここに来ていいよ。私はずっとここに居るから」

笑い合う二人。

？が腕につけているミナにあげたエカエカ（ミサंगा）に似ている  
ミサंगाがキラリと光る。

ED